

大卒の初任給は 30,000 円、リバイバルで耳にしたブルーシャトールがトップチャートを賑わし、急速に普及し始めたカラーテレビでは後に知る赤影、黄金バット、ウルトラセブンやジャイアントロボがリアルタイムの少年少女を釘付けにした。以来どれだけの時間が僕たちの上を駆け抜けただろう。1967、僕たちの生まれたあの日から。

父親に肩車をされた写真は見たけど大阪万博の記憶はない。高度成長期も終わりに差し掛かった昭和 42 年、僕と千秋さんはひつじ年で同い年。初対面のあの日、僕に親しみを込め「ジュリー」と声をかけてくれた 4 人のうちの 1 人。僕がこの世界に出会い惹かれた瞬間を知る数少ない目撃者。

1989、六畳二間、ところどころ妙に足が沈む暗く細長い部屋、はじめてやまなみの扉を抜けたその中央で腰を据え、周りから一目置かれていることを醸し出す千秋さんの覇気は、青二才だった僕の嗅覚をくすぐり、生意気な転校生を迎え入れる 3 年 B 組のワンシーンのようだった。

同い年ゆえ妙なライバル心と親近感、性格や体質は違えども、およそどの場面でも互いの気持ちや趣味趣向が似通う僕たちは体の中で少し違うところがあるらしい。それは細胞内の 21 番目の染色体、僕は 2 本、千秋さんは何らかの原因によって 3 本ある。調べてみると遺伝などに関係なく偶発的に生じることがほとんどで、世界で最初の報告者となったイギリス人、ジョン・ラングドン・ダウン医師の名前によりダウン症候群と命名されたそうだ。

毎年同じ年齢を数える千秋さんと僕はいたって健康、毎日ふざけあって笑ったり、些細なことで気まづくなるとは距離をとったり、優しさに触れたと思えばざる賢さにムカついたり、その時々で互いの役柄は常に交差した。

千秋さんは刺繍が得意だ。細い糸、細い針、細かな作業を毎日繰り返す彼女の行為と集中力に僕は自分には絶対無理だという思いからなる尊敬と、得意なことがある彼女を羨ましく思っていた。

千秋さんが刺繍を始めたきっかけは、ある時期数年過ごした入所施設で仲の良かった支援員から教わったと聞いたことがある。千秋さんに刺繍をする理由を尋ねたときは「お母さんがお金ない言うからウチも頑張る」と答えが返ってきたこともある。

当初、千秋さんの刺繍は内職仕事の一環として位置付けられ、パナマ先住民「クナ族」の色鮮やかな民族衣装に施されている刺繍表現「モラ刺繍」を模倣し安価なポーチへと姿を変えた。

1998、当時の STAFF と夜遅く展覧会の準備をしながらふとポーチになる前の刺繍を額に当てたとき、「これポーチにするより額装したほうがいいのかも」見違える景色に思わず言葉を発したことがきっかけとなり、型取りに沿った刺繍の商品は彼女が縫いたいものを縫いたいように表現する作品へと形を変えた。以来彼女は糸で絵を描く人として自らの環境を整え、周りの状況に左右されない不変的な自分のルールとスタイルを築いた。

1 年に 1 作品、大きいものは 2 年を要した作品もある。今も様々な展覧会から依頼を受ける代表作の一つ「まつり」が完成したのは日本が北京オリンピックに沸いた 2008、作品を

前に僕はまさしくなんも言えねえ気持ちになった。

2017、東京で開催された日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS ミュージアム・オブ・トゥギャザーでは作家を代表し文仁親王妃紀子様を会場でお出迎えし、大好きだった香取慎吾さんとカメラの前で肩を並べた。40代最後の年、斜に構えたあの日の僕と千秋さんが礼節をわきまえすっかり丸くなったのは一重にたくさんの皆様と経験の賜物だ。

その後も僕の想像をはるかに超えた大活躍。同時にそのことを最も喜びとしていた母との別れが千秋さんに迫っていることも想像してはいなかった。キャディーの仕事に就き、いつも真っ黒に日焼けをしたお母さんは我が子に向ける視線を僕にもくれた。この年になれば自分の体と親の介護が会話を占める。気が付けば諸先輩が口にしてきた年齢に僕も千秋さんもなっていた。

2021、お母さんは亡くなった。この頃だろうか、千秋さんが最も信頼を寄せる担当の上西さんが彼女の異変に気づき始めたのは。他の誰かであれば見過ごしていただろう小さな変化は上西さんの目に留まった。言葉が出ない、目が見えづらい、時間や季節、場所、人間関係が少しずつ分からなくなる、施した刺繍の痕跡は同一人物のものとは信じがたい、毎週のように事を変え報告を受ける僕は見当識障害ではなく母との別れの悲しさや寂しさ、そして生活環境の変化が原因ではと判断を誤った。

ダウン症がある人は、一般的に30歳代後半から運動能力が低下し始め、40歳をすぎると筋力や持久力が低下し、アルツハイマー型認知症の発症率が高いと言われている。これはアルツハイマー型認知症の原因物質のひとつと考えられているアミロイドβを産生する遺伝子が過剰にあるため、よく似た症状が出現するためだそう。もちろん白内障などで目が見えにくくなっていたり、耳が聞こえにくくなっていたり、甲状腺機能低下で体を動かすのがつらかったりする場合もあるという。

2023、目の前の千秋さんは変わらない。ただ、千秋さんが僕の名前を呼ぶことはない、頼りにしていた上西さんの名前でさえ出てこない。そして針と糸を持つこともない。先週通院をした際、主治医から脳の萎縮が進行している疑いがあることを初めて聞かされた。

僕と千秋さんは今年56歳、出会った頃のように動けないジレンマは当然ある。一昨日、風邪の症状で欠勤した千秋さんを心配し担当の上西さんと中西さんがグループホームを訪問した。二人の顔を見た途端、千秋さんは大粒の涙を流したそう。その報告を受け僕はとても嬉しくなった。寂しかったのか、嬉しかったのか、涙の理由は分からない。ただ、2人の名前は思い出せなくても千秋さんの心には信頼のおける大切な人としてしっかり存在しているんだ。

2026、僕たちは還暦を迎える。僕のことかどこの誰だかわからなくてもいい。赤い衣装を纏った4年後の僕と千秋さんはお互いの姿に大爆笑、そして千秋さんの全ての作品を前に「よ～頑張ったな」と声をかけるんだ。

千秋、生き続ける限り誰もが避けることのできない現象「老い」を受け入れ、これからも一緒に楽しもうな。